

日本におけるベートーヴェン受容

昭和2年（没後100年祭）以降のベートーヴェン（1）

福本康之

1. はじめに

「楽聖」 現代の日本において、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（Ludwig van Beethoven 1770-1827）の名を耳にした多くの人が頭に描く、代表的なイメージである。また逆に、「楽聖」という言葉から多くの人が、ベートーヴェンその人を連想するであろうことに、異を唱える人はそれほどいないであろう。このような「ベートーヴェン＝楽聖」というイメージは、音楽界という枠組みを超え、広く一般社会という範囲で、現代の日本において定着しているものである。

筆者は、これまでの研究¹⁾で、こうしたイメージの形成において、作曲家の没後100年にあたる昭和2（1927）年が、ひとつの転換点になったことを明らかにした。昭和2年には、作曲家の没後100年を記念する音楽会や講演会が日本の各地で行われており、その規模は、当時の音楽界の枠を超えたものであった。そこで語られるベートーヴェンとは、大正時代の修養主義において語られた、理想的な人間像を体現した人物で、それは、曲家という枠組を超えた「聖人」としての扱いであった。「ベートーヴェン＝楽聖」というイメージは、このとき確立されたのである。

しかし、筆者前稿「日本におけるベートーヴェン受容 明治・大正期の音楽雑誌の記事から」でも明らかにしたように、ベートーヴェン（とその作品）が日本において受容され始めた当初は、バッハやモーツァルトとともに、単に「楽聖」の一人として扱われていた²⁾にすぎない。また、西洋の作曲家に関する当時の記述では、多くの作曲家が「楽聖」として紹介されてもいる。洋楽の導入が開始されてから暫くの間、「楽聖」という言葉は、何もベートーヴェンの代名詞ではなかったのである。

また、昭和2年までの音楽雑誌に見られる記述には、逸話とともに語られる「ムーンライト・ソナタの作曲者」としてのイメージを伴うものが多い³⁾。こうした例のように、ベートーヴェンに関しては、昭和2年までにも、「楽聖」という視点以外で語られることも、決して少なくはなかった。とすれば、昭和2年を機に「楽聖」としてのイメージが定着したベートーヴェンであっても、それ以前同様、「楽聖」として以外の視点から語られる可能性がそれ以降にあったとしても、なんら不思議なことではない。

本稿は、「ベートーヴェン＝楽聖」というイメージが確立した昭和2年以降、ベートーヴェンとその作品がどのように受容されていったか、を明らかにしようとする試みである。ただし、日本におけるベートーヴェン受容といっても、それは様々な社会的階層において、それぞれ違った様相を呈すると考えられよう。そこで本稿では、まず洋楽受容の中で指導者的な立場にあった者たちが、ベートーヴェンとその作品を当時どのように理解していたかを、次章に挙げた資料から読み解く方法をとることとする。

2. 資料に関して

本研究では、1章で述べた目的にそって、当時の主要な音楽雑誌5誌⁴⁾と新交響楽団の演奏会記録⁵⁾を対象資料として扱う。ここでは、これらの資料をとりあげる理由やそれに対する視点について述べておく。

2.1. 主要音楽雑誌の記事について

雑誌の編集者は、その記事内容について、読者（一般愛好家）層の需要を考慮するであろう。その意味で、当時の音楽雑誌に掲載された記事内容は、「当時の読者層（＝音楽愛好家層）が、ベートーヴェンにどのような関心を抱いていたか」を、ある程度は反映したものとして読むことができる。

しかし、当時の音楽雑誌の編集者（あるいは記事執筆者）には、音楽愛好家層の拡大や音楽界の充実といった、啓蒙的な役割を自負するものも少なくは無い。読者の要望を、編集者が「相応しくない」あるいは「取るに足らない」と判断すれば、読者側のその手の需要は、雑誌の記事として反映されなかったであろう。したがって、音楽雑誌に掲載された記事は、必ずしも読者からの要望に応じたものであったとは考えられない。そうした理由から、「当時の読者層（＝音楽愛好家層）が、ベートーヴェンにどのような関心を抱いていたか」ということに関しては、当時の音楽雑誌の記事内容が、ある程度は反映したであろうが、決してその全貌を明らかにするものではない、と筆者は考える。

さらに記事の中には、読者層からのリクエストが無くとも、編集者サイド（情報提供者として記事を執筆する音楽学者や音楽ジャーナリストを含む）が、提供すべき（するに相応しい）と判断した種類の情報も含まれているであろう。そうした可能性を鑑み、本稿では、当時の音楽雑誌に掲載されたベートーヴェン（とその作品）に関する情報を、以下のような性格を持つものとして見ていく。

1. 当時の日本の音楽界において、指導的な立場（編集者サイド）にあった人物が「求められており、相応しい」と判断した、ベートーヴェンについての情報
2. 当時の日本の音楽界において、指導的な立場（編集者サイド）にあった人物が、「求められてはいないが、提供すべきだ」と判断した、ベートーヴェンについての情報

これら2つの性格については、どの記事がどちらの性格を有したものであるかという明確な線引きを出来るものではない。また、両方の性格を有するものも多いであろう。しかし、ベートーヴェン関連の記事が、いずれの性格のものであるにせよ、それらは、特定層のベートーヴェン受容の状況を読み解くことを可能たらしめるものである、と筆者は考える。それは、洋楽受容において指導的な立場にあった人物が、当時の日本におけるベートーヴェン受容の状況をどのように捉え、ベートーヴェンに関する啓蒙活動をどのように展開すべきと考えていたか、ということである。

なお、本稿でいう当時の「主要な音楽雑誌」とは、『月刊楽譜』と『音楽世界』、『音楽評論』、『音楽新潮』、『音楽倶楽部』の5誌である。この5誌を主要な音楽雑誌とした根拠は、これらが戦時下政策に

よる昭和16年10月の第1次音楽雑誌統廃合において、『音楽之友』と『音楽公論』に統合されており、その刊行意義を認められていたと判断したことによる。

2.2. 対象とする演奏団体と演奏会に関して

洋楽の演奏会は、当時プロによるものも、アマチュアによるものも、次第に増加する傾向にあった。しかし本稿では、前節で述べたように、音楽雑誌から読み解きうるベートーヴェン受容が、「当時の日本の音楽界において指導的な立場にあった人々」においてのものであると判断したことに倣い、アマチュアによる演奏会は対象外とし、当時指導的立場にあったプロによる演奏会のみを対象とする。

まず、プロによる演奏会関連の資料（その多くは、パンフレットや広告）から得ることが可能な、当時のベートーヴェン受容に関する情報としては、以下のものが考えられる。

1. 上演された作品の内訳
2. 上演作品に付随する記事

このうち、2に関しては、前節でとりあげた音楽雑誌の記事と同じ視点で見ることができよう。次に1に関しては、演奏会のプログラム自体が、大きく分けて以下の2つに分類されることを念頭において見ていく必要があるだろう。

- A. 演奏家（あるいは演奏団体）自身の研鑽のためのプログラム
- B. 聴きやすい作品を中心としたプログラム

Aのプログラムは、主にオーケストラの定期演奏会や特別演奏会などに見られるもので、聴衆側の需要とうよりは、むしろ楽壇における指導的立場を考慮したものである。それに対し、Bのプログラムは、音楽教室や地方公演などに見られるような、聴衆側の需要を考慮したものといえる。よって本研究では、「当時の日本の音楽界において指導的な立場にあった人々」におけるベートーヴェン受容を読むために、Aに分類される演奏会関連の資料を扱うことにする。

また、演奏会と作品ジャンルの関係についていえば、ベートーヴェン以外の作曲家をも含めた交響曲あるいは管弦楽というジャンルにおける「演奏」面での受容状況に関して、オーケストラの定期演奏会という定点観測的な場が存在する。それに対し、ピアノ・ソナタや弦楽四重奏曲といった室内楽作品では、オーケストラのように、特定の演奏家が定期的に長期間にわたって網羅的な作品を演奏するという場合は、当時の楽壇状況からして考えにくい。

そこで、室内楽というジャンルについては、特定の人物あるいは組織による方針のもとで、供給された演奏として、当時のレコードを対象としたいと考える。実際には、音楽雑誌に掲載されたレコード評

を対象とするが、これによって、当時の指導者層が、どのような作品を推薦あるいは重要視していたかという傾向が明らかになる、と筆者は考える（ただし、これについては、稿を改めて論じたい）。

以上の理由から、本稿では、オーケストラの演奏会の場合について見ていくことにする。その際に、どのオーケストラを選ぶかは、次の事項を基準とした。

- a．昭和2年当時から継続的な演奏活動を行っている
- b．演奏会の全貌が、現存する資料より明らかとなっている

昭和2年当時、日本の交響楽運動は、ようやくプロのオーケストラが結成されたばかりという状況であった⁶⁾。当時、継続的な活動を展開していたことが確認されているのは、新交響楽団と宝塚交響楽団の2団体である。このうち、宝塚交響楽団は、昭和2年にベートーヴェン祭を行うなど、積極的かつ継続的な演奏活動を展開しているが、演奏記録に関する資料の不足によりその全貌をつかむことができないため、本研究の対象からは除外する。

また戦前では、中央交響楽団（現：東京フィルハーモニー交響楽団）は、結成こそ昭和15年であるが、昭和2年から10年以上経っており、ほぼ戦時体制下に入って以降の活動であるため、こちらも今回の対象からは除外した。

以上より本稿では、昭和2年当時から継続的な活動を展開し、その全貌がほぼ明らかになっている、新交響楽団を調査対象の演奏団体として選んだ。

では早速次章において、実際に主要な音楽雑誌の記事において、ベートーヴェンとその作品が、どのような形で現れたかを見ていくことにする。

3. 音楽雑誌にみるベートーヴェン関連の記事

3.1. 音楽雑誌に掲載された記事の傾向

ここでは、各雑誌に掲載されたベートーヴェン関連の記事について、その内容に関する傾向を検討していく。だが、雑誌に掲載された関連記事そのものには、様々な種類のものが見られる。作曲家や作品についての記事もあれば、エピソード的なものや演奏会評（あるいはレコード評）、書籍紹介などもある。その中から今回は、執筆者自身が直接ベートーヴェン自身やその作品などについてとりあげているものを、対象資料として扱う。なお、それ以外に分類されるベートーヴェン関連書籍の評や演奏会評、レコード評は、特別なものを除き、次稿の資料集にて収録する予定である。

主要音楽雑誌5誌の中で最も創刊時期の早い『月刊楽譜』には、昭和2年の没後100年祭以降、その終刊⁷⁾のまでに、60件の関連記事が確認される。そのなかには、ベートーヴェンをトルストイやゲーテとの関連から考察したもの⁸⁾や、パウル・ベッカーなどによる当時最新の研究を紹介するものなど⁹⁾、昭和2年以前にみられた傾向の記事¹⁰⁾を見てとることができる。しかし、この『月刊楽譜』で最も顕著

といえる特徴は、作品関連の記事が3分の2にあたる40件にもなる点である。

作品に関する記事がこれだけの割合を占める理由のひとつは、長期にわたる連載記事が3つも企画されたためである。まず最初の連載は、堀川進によるピアノ・ソナタ作品の分析で、没後100年祭の翌昭和3年から開始される。2つめの連載記事は、昭和8年から始まるメルスマンの論考で、こちらはベートーヴェンの作品を様々な様式上の視点から論じたものを、野村良雄が翻訳する形で紹介したものである。そして、この翌年（昭和9年）からは、再びピアノ・ソナタの作品解説が、コルトー（松本太郎訳）の連載として始まる。これらの連載は、それぞれ8回、9回、10回にわたって掲載されており、当時の『月刊楽譜』の記事の中でも、最も長期間にわたる。その意味でこれらの記事は、昭和1ケタ年代の中心的なものとしてみることができよう。では、こうした傾向は、当時のベートーヴェン受容において一般的なものなのであろうか。

作品に関する長期連載記事は、同じく既に大正時代から続いていた『音楽評論』や『音楽新潮』には見られない。その意味で、作品に関する長期連載記事は、『月刊楽譜』独自のものといえよう。しかし、『音楽評論』と『音楽新潮』の両誌においても、作品関連の記事が占める割合は、全ベートーヴェン関連記事のうち、それぞれ45件中22件、77件中40件と、『月刊楽譜』同様にかかなりの割合を占めている。このように、主要音楽雑誌のうち、没後100年祭当時から継続して刊行されていたものには、作品の解説がかかなりのウェイトを占めていた。これは割合としても、昭和2年以前¹¹⁾と比べ、かなりの増加である。またそうした傾向は、後発雑誌となった『音楽新潮』や『音楽倶楽部』にも見られる¹²⁾。

ただ対象となる作品として、『音楽評論』では《ミサ・ソレムニス》や歌劇《フィデリオ》、第9交響曲といった大曲が多く、『音楽新潮』では、交響曲全般とヴァイオリン・ソナタや弦楽四重奏曲などの室内楽作品を比較的広範囲にわたってとりあげている。そして、それぞれの雑誌で取り上げられる作品は、ジャンルの重複も少なく、この『月刊楽譜』と『音楽評論』、『音楽新潮』の3誌によって、今日ベートーヴェンの主要ジャンルとされる作品の多くは、おおよそこの時代に紹介されたといえる状況となった。

3.2. 人物像から作品へ

1章で述べたように、明治から大正にかけての音楽雑誌に見られるベートーヴェン像のひとつに、「ムーンライト・ソナタの作曲者」というものがあった。これは、ピアノ・ソナタ第14番 Op.27-2という特定の作品と、それにまつわる逸話を中心として語られたベートーヴェン像で、昭和2年以前に語られたベートーヴェン像のなかで、もっとも代表的なものであり、また作品と結びついたものとしては、ほぼ唯一のものであった¹³⁾。

それに対し、昭和2年の没後100年祭では、筆者前稿¹⁴⁾でも述べたように、ベートーヴェン関連の音楽雑誌における記事や演奏会、関連イベントの記事が、非常に多かった。にもかかわらず、その中で、ベートーヴェンが特定の作品との関連で語られることは殆どない。特にベートーヴェン像の形成に大きく影響したであろう、音楽雑誌の記事をみても、その多くは、ベートーヴェンという「人物」自体を取

り上げたものである。

この傾向は、昭和2年に向かって「楽聖」像が形成される中でも見られるもので、先にあげた「ムーンライト・ソナタの作曲者」という以外の言説では、「偶像破壊者及び民主々義としての聖ベートーヴェン」¹⁵⁾ など、ベートーヴェンの「生き方」や「伝記」を扱ったものが多く見られる。もちろん、個々の作品が取り上げられて解説されている例も決して少なくは無いのだが、作曲活動や個々の作品については、概観しただけのものが大半を占めており、また特定の作品が特に多く記事にあがるということもない。

その意味で、昭和2年の「楽聖」像形成は、ベートーヴェンという作曲家の「作品」よりも、その「人物像」を中心に行われたと考えてよいだろう。そして、そこで形成された「楽聖」像は、未だ特定の作品と結びついたものではないと考えられる。

しかし、この没後100年祭を契機に「楽聖」たるベートーヴェン像が定着する、あるいは没後100年祭に向けてベートーヴェン自身の認知度が次第に上昇するにしたがって、昭和2年の前後より、主要な音楽雑誌のベートーヴェンに関する記事では、新しい傾向が見られ始める。それ以前は単発的に紹介されてきたベートーヴェンの作品が、既に前節で述べたように、今度は、体系的な楽曲理解に向けた連載記事あるいは特集記事の形で取り上げられるようになったのである。既に触れた以外の記事（『音楽世界』と『音楽倶楽部』に掲載された記事）も含め、以下にその一覧を示しておく。

【ベートーヴェンに関する連載記事】 詳細は稿末資料を参照

- ・門馬直衛による弦楽四重奏曲の解説
- ・黒澤隆雄によるピアノ・ソナタの解説
- ・伊藤義雄によるピアノ・ソナタの演奏法と解釈
- ・堀川進によるピアノ・ソナタの解説
- ・メルスマン（野村良雄訳）による様式関連の論文
- ・コルトー（松本太郎訳）によるピアノ・ソナタの解説
- ・ベルリオーズによる「ベートーヴェンの交響曲・批判的研究」
- ・福井直俊によるピアノ・ソナタの解説
- ・ロマン・ロラン（片山敏彦訳）による連作歌曲関連の記事

【ベートーヴェンに関する特集記事】 詳細は稿末資料を参照

- ・ベートーヴェンの室内楽に関する特集号（2つ）
- ・第九交響曲に関する特集号

こうした新しい傾向の連載記事、あるいは特集記事の多くは、ピアノ・ソナタや弦楽四重奏曲、交響

曲を中心としたものである。これらは、今日においても、ベートーヴェン作品のなかでも主要なジャンルとして理解されているもので、こうした連載あるいは特集記事は、日本におけるベートーヴェン受容において、作品の体系的な理解へと可能性を開いた最初期のものといえよう。さらに、これらのジャンルの作品に関する記事は、単発の記事においても、ベートーヴェン関連の記事中に占める割合が格段に増加（全関連記事 312 件中 186 件）しており、これらも連載あるいは特集記事と同様、作品理解への役割を担っていたと考えられる。

実際には、こうした記事がどれだけの理解を読者層に促したかは定かではないが、少なくともこの当時の音楽界の指導者層が、ベートーヴェンに関して、人物像から次第に作品へと関心の対象を移していった、あるいは作品を世に紹介していく時期だと考えていた、と見做してよいだろう。そして、ベートーヴェンの主要なジャンルが、ピアノ・ソナタや弦楽四重奏曲、交響曲といったソナタ形式によるものである、という理解も、このころの指導者層において定着しはじめたもの、と考えられるのではないだろうか。

しかしその一方で、依然としてベートーヴェンの人物像にスポットを当てた記事も見られる。セイヤー（牛山充訳）によるベートーヴェンの伝記¹⁶⁾を連載記事にしたものなどは、その代表的な例である。このように考えると、日本の音楽界における指導者層でのベートーヴェン受容は、この昭和2年の没後100年祭前後から、単に人物像からその「作品」へと移行したのではなく、人物と作品の両面に広がりを見せたということができるであろう。

だが、これらの特集や連載記事で採り上げられている作品関連の内容は、主に楽曲そのものの分析を中心とした楽曲解説であり、「楽聖」ベートーヴェン像を裏付けるものではない。その意味で、この段階でのベートーヴェン受容は、まだ人物像と作品が総合的に論じられ、理解されたものであったとは考えにくい。

4. 新交響楽団におけるベートーヴェン作品の演奏

4.1. 作品演奏の割合

新交響楽団は、結成の翌昭和2年より定期演奏会システムを開始し、この年、没後100年を記念して、交響曲をほぼ全曲に近い形でとりあげた「ベートーヴェン連続演奏会」を企画している¹⁷⁾。同楽団は、当時の日本楽壇およびオーケストラ界のイニシアティブであり、そのプログラムには、楽団自身の実力向上目的以外にもかなりの啓蒙的意味合いがあったと考えられる。

実際に、ベートーヴェン関連では、昭和2年の連続演奏会以降にも、連続ではないが、オール・ベートーヴェン・プログラムによる定期演奏会だけで、25回¹⁸⁾を数える。終戦までに267回を数える定期演奏会の中で、単一作曲家の作品によるプログラムの演奏会として、バッハやモーツァルト、ハイドン、ヴァーグナー、ブラームス、チャイコフスキーをとりあげたものが各1回ずつ程度（ハイドンは2回）あるだけの状況の中で、この回数は飛びぬけて多い。また、他の作曲家の作品とのカップリングによる

場合もあり、作品数でいえば 1004 作品中の 136 曲と 1 割以上を占める。一作品で一公演が成立する場合もあれば、その逆に短い作品もあり、一概にはいえないが、とりあげられているベートーヴェン作品の多くは交響曲や協奏曲で時間的にも長く、ベートーヴェン作品の定期演奏会に占める割合は、非常に高いといってよい。その意味でも、新交響楽団が、いかにベートーヴェン作品を重要視していたかがわかるであろう。ここで、同楽団の機関誌『フィルハーモニー』に目を向けてみよう。

4.2. 『フィルハーモニー』に掲載された記事

『フィルハーモニー』は、もともと演奏される作品の手引きとして創刊されており、楽曲解説として掲載された作品の割合は、基本的には演奏された作品のそれと同じである。しかし、読み物として掲載された記事は、そうした演奏会でとりあげた作品についてばかりではない。『フィルハーモニー』では、特集記事などが生まれ、同楽団の方針がそこから伺えるものとなっている。

演奏回数同様、ベートーヴェン関連の記事は 48 点（終戦まで）と比較的多く見られ、ベートーヴェンに対する同楽団の関心度の高さが伺える。さらに注目されるのは、そうした記事の中で、際立って多く見られるのが《第 9 交響曲》関連の記事であり、その数が 11 点と、飛びぬけて多いことである。

【『フィルハーモニー』に掲載された《第 9 交響曲》関連の記事】

- 山田實「第九交響曲と先生と私」第 3 巻第 2 号
- 近衛秀麿「第九交響曲の上演」第 4 巻第 2 号
- 津川生「第九を唱ってから」第 4 巻第 4 号
- 貴志康一「ベートーヴェン第九交響曲の指揮に臨んで」第 10 巻第 2 号
- 尾崎喜八「「第九」の初演当時を顧みて」第 10 巻第 2 号
- 湯浅永年「第九との深い縁」第 10 巻第 2 号
- 泉清「第九交響曲上演史録」第 10 巻第 2 号
- 山根銀二・諸井三郎「「第九」批評」第 10 巻第 3 号
- 山根銀二・諸井三郎「故貴志康一氏指揮の第九交響曲批評」第 11 巻第 11 号
- 辻壮一「ベートーヴェンの『第九』に於ける浪漫的形式要素」第 14 巻第 6 号
- 諸井三郎「ベートーヴェン作交響曲第九番二短調」第 17 巻第 6 号

また数少ない特集としては、歌劇《フィデリオ》の上演に際して、以下の記事で特集が組まれている。

【『フィルハーモニー』に掲載された歌劇《フィデリオ》関連の記事】

- 牛山充「四つのフィデリオ序曲」第 13 巻第 11 号
- 大森太郎「フィデリオの完成されるまで」第 13 巻第 11 号
- 秋山準「フィデリオ見聞記」第 13 巻第 11 号

牧定忠「ベートーヴェン作歌劇「フィデリオ」詳解」第13巻第11号

こうしたパンフレットでのとりあげ方は、《第9交響曲》と歌劇《フィデリオ》を、新響がベートーヴェン作品の中でも特別に重要視していたことを示す資料として、読むことができる。しかし、これらの作品に対する特別な視点自体は、実は先にあげた音楽雑誌にも見られるのである。記事そのものとしては、特集などの形をとられていないが、それぞれの音楽雑誌において、《第9交響曲》や歌劇《フィデリオ》に関する記事が見られる号（稿末資料参照）が発売される前後には、新交響楽団が定期演奏会でこれらの作品をとりあげている。

つまり、新交響楽団におけるベートーヴェンのこれら2つの作品の演奏は、当時の日本の音楽界において、非常に関心を呼んだイベントであったと考えられる。とすると、総合的に作品理解が進んだベートーヴェンではあるが、特にこれら2つの作品は、作曲家の代表的な作品として考えられていた、と思われる。

この時期にはまだ、作品と作曲家像が、総合的には論じられていなかったベートーヴェンではあるが、これら2作品のクローズアップは、ともすれば作品理解の面から「楽聖」像を中心と結びつき、ベートーヴェンの総合的な理解を構築していくことになるのではないだろうか。これを次稿への仮説として、ひとまず本稿を終わることにする。

【注】

- 1) 福本：1999、福本：2000 参照。
- 2) 福本：2000, pp.116-117。
- 3) 福本：2000, pp.118-119。
- 4) 『月刊楽譜』、『音楽世界』、『音楽新潮』、『音楽評論』、『音楽倶楽部』の5誌を指す。これらの雑誌は、昭和16年の第1次音楽雑誌統廃合において統合され、『音楽公論』と『音楽之友』の2誌という形で継続される。
- 5) 演奏記録は、小川：1983による。
- 6) 大正期に山田耕筰を中心に「日本交響楽協会」が演奏活動を開始するが、ほどなく頓挫する。安定して継続的な演奏活動を展開したオーケストラは、昭和2年に定期演奏会を開始した新交響楽団が実質的に最初である。
- 7) 昭和16年10月号（第30巻第10号）。
- 8) 梅津勝男訳「ベートーヴェンとゲエテ」：『月刊楽譜』第20巻第4～6号など。
- 9) 青地二郎訳「ベートーヴェン論稿」：『月刊楽譜』第28巻第1～2号など。
- 10) 福本：2001 参照。
- 11) 上掲書参照。
- 12) 本稿末資料。
- 13) 福本：2000, pp.118-119。
- 14) 福本：2000。
- 15) 『音楽界』230号、楽界社、PP.9-12。
- 16) セイヤー（牛山充訳）「ベートーヴェン伝」：『音楽倶楽部』10巻9号～12巻10号。
- 17) 福本：2000, pp.84-85。
- 18) 第31、40、60、62、64、92、145、147、149、150、152、157、164、173、175、177、179、193、

211、217、219、221、225、234、266 回定期演奏会。

【主要参考文献】

- 福本康之「日本におけるベートーヴェン受容 昭和2年のベートーヴェン没後100年祭」国立音楽大学音楽研究所『音楽研究所年報』第13集, pp.75-92, 2000.3.
福本康之「日本におけるベートーヴェン受容 明治大正期の音楽雑誌の記事から」国立音楽大学音楽研究所『音楽研究所年報』第14集, pp.115-134, 2001.3.
小川昂編『新編日本の交響楽団定期演奏会記録1927-1981』民音音楽資料館, 1983.

資料：昭和戦前期の主要音楽雑誌に収録されたベートーヴェンの作品に関する記事
ここに収録した雑誌記事一覧は、ベートーヴェンに関連するもののうち、本論の内容と紙面の都合から、特に作品に関するもののみをとりあげ、リスト化したものである。

またここに収録した記事は、主要音楽雑誌5誌『月刊楽譜』、『音楽評論』、『音楽世界』、『音楽新報』、『音楽倶楽部』においてベートーヴェンの没後100年以降にあたる昭和2年4月発行分以降に掲載されたものである。
なお、以下にあげた記事のデータについては、雑誌の本文中に記された執筆者名と翻訳者名、タイトル(サブタイトルを含む)を転載し、必要に応じて筆者による補記を[]内に記載した。その際、連載分については、第1回分の執筆者(および翻訳者)表記を転載し、全連載分のタイトル以下の書誌情報を一括してリストとした。現物未確認などによる理由から、正確な情報が把握できていない書誌データに関しては「」を持って記した。記事リスト中、記事タイトル(「」内)あとの数字は、それぞれ雑誌の巻・号を示す。例)16(4) 第16巻第4号

資料1 『月刊楽譜』に収録されたベートーヴェンの作品に関する記事

- 大沼魯夫「ベートーヴェンの序曲解説」16(4) pp.54-56
XYZ「ベートーヴェンの「情熱の曲」の話」16(6) pp.18-20
重信常義「ベートーヴェンの交響曲」16(7) pp.23-26
正司憲太郎「ベートーヴェンの室内楽(室内楽研究三)」16(9) pp.21-26
堀川進
「ベートーヴェンのピアノ・ソナータ物語(一)」17(3) pp.19-23
「ベートーヴェンの幼時の生活と作品(ベートーヴェンのピアノ・ソナータ物語2)」17(4) pp.15-19
「ベートーヴェンの最初のソナータ(ベートーヴェンのピアノ・ソナータ物語3)」17(5) pp.13-16
「ベートーヴェンの幼時のソナータ(ベートーヴェンのピアノ・ソナータ物語4)」17(6) pp.20-24
「ベートーヴェンのヴァイオリン生活(ベートーヴェンのピアノ・ソナータ物語)」17(7) pp.60-65
「ベートーヴェンのピアノ演奏技巧(ベートーヴェンのピアノ・ソナータ物語6)」18(3) pp.19-23
「ベートーヴェンの最初のソナータ(ベートーヴェンのピアノ・ソナータ物語7)」18(4) pp.53-56
「ベートーヴェンの最初のソナータ(ベートーヴェンのピアノ・ソナータ物語8)」18(5) pp.7-12
NM生 誰にも解る名曲解説(一)第七交響曲イ長ベートーヴェン作曲」17(10) pp.61-62
門馬生「ベートーヴェンの第九 合唱」交響曲の話」18(11) pp.35-41
メルスマン(野村良雄訳)
「ベートーヴェン(1)諸様式の総合」22(1) pp.69-74
「ベートーヴェン(2)諸様式の総合」22(2) pp.44-50
「ベートーヴェン(3)諸様式の総合」22(3) pp.26-30
「ベートーヴェン(4)諸様式の総合」22(4) pp.17-21
「ベートーヴェン(5)諸様式の総合」22(6) pp.37-43
「ベートーヴェン(6)諸様式の総合」22(7) pp.38-42
「ベートーヴェン(7)諸様式の総合」22(9) pp.72-76
「ベートーヴェン(8)諸様式の総合」22(11) pp.75-83
「ベートーヴェン(9)諸様式の総合」22(12) pp.19-28

箕作秋吉と深井史郎による論戦記事

箕作秋吉「ベートーヴェン交響曲の改訂に就て」22(3) pp.79-81

深井史郎「再びベートーヴェン交響曲の改訂に就いて 箕作秋吉氏のために」22(4) pp.66-71

箕作秋吉「ベートーヴェン交響曲の改訂に就て 深井史郎に答ふ」22(5) pp.104-108,110

アルフレ・コルトー（松本太郎訳）

ベートーヴェンの三十二ピアノ・ソナタ(1) 23(4) pp.12-18

ベートーヴェンの三十二ピアノ・ソナタ(2) 23(5) pp.36-43

ベートーヴェンの三十二ピアノ・ソナタ(3) 23(6) pp.34-41

ベートーヴェンの三十二ピアノ・ソナタ(4) 23(7) pp.41-47

ベートーヴェンの三十二ピアノ・ソナタ(5) 23(8) pp.28-34

ベートーヴェンの三十二ピアノ・ソナタ(6) 23(9) pp.36-43

ベートーヴェンの三十二ピアノ・ソナタ(7) 23(10) pp.62-69

ベートーヴェンの三十二ピアノ・ソナタ(8) 23(11) pp.88-97

ベートーヴェンの三十二ピアノ・ソナタ(9) 24(1) pp.62-68

ベートーヴェンの三十二ピアノ・ソナタ(10) 24(2) pp.78-85

服部正「ベートーヴェンの『田園交響楽』」23(12) pp.50-53

ベルリオーズ 菅原明朗訳「ベートーヴェンの第一交響曲」28(7) pp.15-17

ベルリオーズ 菅原明朗訳「ベートーヴェンの第五交響曲」28(10) pp.46-49

服部正「ベートーヴェンの現代的意義 第五交響曲を中心として」28(10) pp.26-29

松本太郎「巴里とベートーヴェンの第五交響曲」28(10) pp.32-39

堀田善衛「ベートーヴェン探求」28(12) pp.2-7

資料2 『音楽評論』に収録されたベートーヴェンの作品に関する記事

ベートーヴェン主要作品年表 7(6) pp.90-92

安部幸明「ベートーヴェン後期の四重奏曲」7巻6第) pp.25-32

野村光一「ベートーヴェンの洋琴奏鳴曲に対する私見」7(6) pp.33-35

渡鏡子「第九」の演奏に関するワーグナーの言葉(1) 7(6) pp.36-39

牧定忠「ベートーヴェンの交響曲の歴史的位置」7(6) pp.40-43

森本芳雄「ベートーヴェンの宗教合唱曲に就いての一つの覚書(一) 荘厳彌撒曲」を中心に」7(6) pp.44-52

津川圭一「ベートーヴェンの序曲『フィデリオ』」7(6) pp.53-57

有馬大五郎

「ベートーヴェン荘厳彌撒研究(二)」8(1) pp.142-146

「ベートーヴェン荘厳彌撒研究(三)」8(2) pp.74-77

初回記事未確認

二見孝平「歌劇史上の『フィデリオ』の位置」8(12) pp.18-24

高野瀏「ベートーヴェンの芸術に於ける『フィデリオ』の意義」8(12) pp.25-31

平尾貴四男「ベートーヴェンの第八交響曲」8(12) pp.88-89

ヨゼフ・ローゼンシュトック/園部三郎「第九交響曲を廻って」9(6) pp.18-23

山根銀二

「第九」は如何にして完成されたか ノッテボームによる第九交響曲成立の経緯 9(6) pp.24-32

「第九」は如何にして完成されたか(2) ノッテボームによる第九交響曲成立の経緯 9(7) pp.54-61

「第九」は如何にして完成されたか(3) ノッテボームによる第九交響曲成立の経緯 9(8) pp.32-37

長廣敏雄「第九」の崇高さについて 9(6) pp.33-37

坂本良隆「第九交響曲の思ひ出」9(6) pp.47-49

牛山充「本邦『第九』演奏史(一)」9(6) pp.50-52

朝比奈隆「第九交響曲についての断片」9(6) pp.53-55

有馬大五郎「第九の暦」9(6) pp.56-57

辻莊一「第九」に現れた作者の人生観の性格 9(6) pp.58-61

資料3 『音楽新潮』に収録されたベートーヴェンの作品に関する記事

- 山田辰彌「ミサとベートーヴェンのミサ・ゾレムニス」6 (1) pp.28-31
 久志卓眞「ベートーヴェンの作品と演奏」12 (7) pp.72-78
 ハミルトン・ハアティ、藍野照子訳「ベートーヴェンの管弦楽作品 指揮者の回想」15 (1) pp.44-51
 津川圭一「ベートーヴェンの宗教楽」15 (1) pp.52-55
 久志卓眞
 「ベートーヴェンの四重奏曲」15 (1) pp.62-68
 「ベートーヴェンの四重奏曲(下)」15 (2) pp.61-67,73
 前田鉄之助「ベートーヴェンの歌曲」15 (1) pp.71-75
 イエリイ・ダラニイ(倉川健三訳)
 「ベートーヴェンのヴァイオリン奏鳴曲」15 (1) pp.76-80
 「ベートーヴェンのヴァイオリン奏鳴曲(完)」15 (2) pp.74-78
 堀江謙吉「管弦楽法から見たベートーヴェンの交響曲」15 (1) pp.82-85,80
 緒方慎太郎「田園交響曲を繞つて」15 (1) pp.86-90
 藤本正一「ベートーヴェンの作品に就て」15 (2) pp.58-60,73
 前田鉄之助「ベートーヴェンの歌曲」15 (2) pp.68-73
 柿沼太郎「ベートーヴェンの第一、第二交響曲に就て」16 (4) pp.2-6
 清水政二「英雄」交響曲」16 (4) pp.7-12
 藍野照子「ベートーヴェンの第四交響曲」16 (4) pp.13-16
 豊島實「第五交響曲の大衆性」16 (4) pp.17-21
 湯淺永年「第六 田園」交響曲」16 (4) pp.22-29
 山田辰彌「第七交響曲をめぐる」16 (4) pp.30-33
 青木千鶴夫「第八交響曲」16 (4) pp.34-38
 門馬直衛「第九交響曲二短調の問題」16 (4) pp.39-47
 豊島實「ベートーヴェンの絃楽四重奏曲序説」16 (11) pp.6-9
 緒方慎太郎「初期の絃楽四重奏曲 作品十八の六曲」16 (11) pp.10-14
 谷晃「ラズモフスキー」四重奏曲 作品五九の三曲」16 (11) pp.15-18
 柿沼太郎「第十及び第十一絃楽四重奏曲 作品七四と九五」16 (11) pp.19-23
 門馬直衛「最後の四重奏曲の様式 特にガリチン四重奏曲を中心として」16 (11) pp.24-31
 久志卓眞「作品一三一、一三二、一三五の絃楽四重奏曲」16 (11) pp.32-37
 柿沼太郎「エピローグ へ長調絃楽四重奏曲 作品一三五」16 (11) pp.38-41
 W・F・ハドウ、藍野照子訳「ベートーヴェンの変奏曲形式」16 (11) pp.42-46
 湯淺永年「ベートーヴェンの作品に於ける室内楽の地位」16 (12) pp.6-12
 柿沼太郎「ベートーヴェンの三重奏曲概観 ピアノ四重奏、五重奏を含めて」16 (12) pp.13-17
 門馬直衛「ベートーヴェンの有管室楽曲」16 (12) pp.18-22
 清水政二「管楽物語第九交響曲」16 (12) pp.35-43
 ベルリオーズ
 「ベートーヴェンの交響曲 批判的研究(一)」17 (4) pp.74-79
 「ベートーヴェンの交響曲 批判的研究(二)」17 (5) pp.62-68
 「ベートーヴェンの交響曲 批判的研究(三)」17 (6) pp.67-73
 「ベートーヴェンの交響曲 批判的研究(完結)」17 (7) pp.61-68
 緒方慎太郎「ピアノ協奏曲 バッハ、モーツァルト、ベートーヴェンへの瞥見」17 (6) pp.43-46
 門馬直衛「ベートーヴェンと変奏曲」17 (12) pp.22-29
 門馬直衛「ベートーヴェンとフーガ」18 (1) pp.26-33

資料4 『音楽世界』に収録されたベートーヴェンの作品に関する記事 黒澤隆朝

- 「ベートーヴェンのピアノソナタの解説(一)」1 (1) pp.46-51
 「ベートーヴェンのピアノソナタの解説(二)」1 (2) pp.18-25
 「ベートーヴェンのピアノソナタの解説(三)」1 (3) pp.32-35
 「ベートーヴェンのピアノソナタの解説(四)」1 (4) pp.16-19

- ベートーヴェン月光ソナタの解説」1 (5) pp.33-36
 ベートーヴェンパセティックソナタの解説」1 (6) pp.13-176
 ベートーヴェンのピアノソナタ解説(承前)」2 (2) pp.60-65
 ベートーヴェンのピアノソナタ解説(承前)」2 (3) pp.74-78
 ベートーヴェンのピアノ・ソナタの解説(承前)」2 (5) pp.111-113

伊藤義雄

- Beethoven's Klaviersonaten „ Sonata Pathetique 演奏法と解釈」6 (1) pp.167-166
 Beethoven'sche Klaviersonaten „ Sonata f moll Op.2. Nr.1[] 演奏法と解釈」6 (2) pp.135-130
 Beethovensche Klaviersonaten „ Sonata C dur Op.2. Nr.[3] 演奏法と解釈」6 (3) pp.135-130
 Beethovensche Klaviersonaten „ Sonata G dur Op.49. Nr.2[] 演奏法と解釈」6 (4) pp.159-153
 Beethovensche Klaviersonaten „ Sonata As dur Op.2.6[26 の誤り] [] 演奏法と解釈」6 (5) pp.167-162
 Beethovensche KlavierSonaten Sonata quasi una Fantasia cis moll Op.27 Nr.2 幻想風奏鳴曲 嬰八短調 作品27の第2 演奏法と解釈」6 (7) pp.135-129
 Beethovensche Klaviersonaten Sonata d moll Op.31. Nr.2. 演奏法と解釈」6 (9) pp.127-121
 Beethovensche Klaviersonaten Sonata F moll Op.57 演奏法と解釈」6 (12) pp.127-121

湯浅永年 『第九シンフォニーの問題』2 (3) pp.79-82

増澤健美 『ベートーヴェンの交響曲再認識』6 (10) pp.86-88

野村良雄 『ベートーヴェン音楽の新研究について』7 (5) pp.41-48

ヴァインガルトナー、堀江謙吉・園田豊太郎訳 『第九交響曲の演出』7 (9) pp.42-55

井口基成 『ベートーヴェンのソナタについて』9 (8) pp.63-67

堀内敬三 『ベートーヴェン第九交響曲解説』10 (9) pp.175-179

資料5 『音楽倶楽部』に収録されたベートーヴェンの作品に関する記事

リヒャルト・ヴァークナー、鈴木賢之進訳 『ベートーヴェンの英雄交響曲』2 (1) pp.10-11

玉置眞吉 『ベートーヴェンの交響楽』3 (1) pp.9-9

フェリックス・ワインガルトナー(秋吉元作訳)

『ベートーヴェンの第七交響曲を如何に指揮すべきか』3 (7) pp.10-13

『ベートーヴェンの第七交響曲を如何に指揮すべきか(二)』3 (8) pp.14-16

『ベートーヴェンの第七交響曲を如何に指揮すべきか(三)』3 (9) pp.29-31

『ベートーヴェンの第七交響曲を如何に指揮すべきか(四)』3 (10) pp.19-21

『ベートーヴェンの第七交響曲は如何に指揮すべきか(五)』3 (11) pp.38-40

門馬直衛

『ベートーヴェンの全ピアノ・ソナタの解説(上)』4 (3) pp.66-78

『楽聖ベートーヴェンの全ピアノ・ソナタの解説(下)』4 (4) pp.82-94

編集部 『名曲解説ベートーヴェンの第五交響曲に就て』4 (7) pp.46-48 ページ数は逆から

本野虫太郎 『名曲の解説ベートーヴェンの第五交響曲『運命』八短調、(作品六十七)』4 (10) pp.39-41

本野虫太郎 『名曲の解説ベートーヴェンの第六交響曲『田園』ヘ長調、作品六十八番』4 (10) pp.41-43

フェリックス・ワインガルトナー 『ベートーヴェン・第七交響曲の指揮法』5 (8) pp.10-24

ワインガルトナー、編集部訳 『ベートーヴェンの第一交響曲の解釈』5 (11) pp.10-15

門馬直衛 『第九交響曲 特集ベートーヴェンの第九交響曲の解釈』6 (1) pp.2-11

秋葉豊 『第九交響曲 特集第九交響曲へのノート』6 (1) pp.12-13

秋葉豊 『ベートーヴェン絃楽四重奏曲イ短調作品一三二』6 (1) pp.61-61+51

有坂愛彦 『チチス・ドイツの第九交響曲』6 (1) pp.64-66

門馬直衛 『第九交響曲の終末合唱楽章の解釈』6 (3) pp.7-13

幹本満里 『月光の曲』に就ての断片』6 (3) pp.14-19

秋葉豊 『ベートーヴェンの第一交響曲に就て』6 (3) pp.2-6

門馬直衛 『ベートーヴェンの最後の形式』6 (5) pp.8-13

秋吉元作 『ベートーヴェンを語る』6 (6) pp.10-13

門馬直衛

ベートーヴェン最後のソナータ ベートーヴェンの最後の様式 2」6 (6) pp.14-17

ベートーヴェンの最後のソナータ (2)」6 (7) pp.15-18

門馬直衛「ベートーヴェンの最後の四重奏曲」6 (8) pp.21-25

J・F・ポルト 森田緑訳「ベートーヴェンの弾き方」6 (9) pp.56-60

田部節訳

スイオドア・トマス

研究ベートーヴェンの第一交響曲 作品二十一番八長調」6 (10) pp.80-89

ベートーヴェンの第二交響曲 作品三十六番二長調」6 (11) pp.82-91

ベートーヴェンの第三交響曲 英雄』作品五十五番、変ホ長調」7 (1) pp.113-131

ベートーヴェンの第四交響曲 作品十六 変ロ長調」7 (2) pp.46-61

ベートーヴェンの第五交響曲」7 (3) pp.52- ? 頁抜けのため終了頁不明

フレデリック・ストック

ベートーヴェンの第六交響曲 作品六十八番ヘ長調」7 (4) pp.44-63

ベートーヴェンの第七交響曲 (上) 作品九十二番、イ長調」7 (5) pp.60-73

ベートーヴェンの第七交響曲 (下) 作品九十二番、イ長調」7 (6) pp.94-107

ベートーヴェンの第八交響曲 作品九十三、ヘ長調」7 (7) pp.106-126

ベートーヴェンの第九交響曲 合唱」作品百二十五番、二短調」7 (8) pp.48-83

マルセル・エルヴェーグ

ベートーヴェンの提琴奏鳴曲第三番 作品十二ノ三 変ホ長調 (一七九九年出版)」7 (9) pp.104-119

ベートーヴェンの提琴奏鳴曲 (スプリング・ソナタ) 作品二十四、ヘ長調、モーリッツ・フォン・フリース伯に献呈」7 (10) pp.81-93

ベートーヴェンの提琴奏鳴曲、第七番 作品三十ノ二、八短調」8 (1) pp.129-147

ベートーヴェンの提琴奏鳴曲、第九番 作品四十七、イ長調 (クロイツェル・ソナタ)」8 (2) pp.82-98

デイ・エフ・トヴィ

ベートーヴェンの作品研究ピアノ協奏曲第三番の解釈 八短調、作品三十七」8 (3) pp.64-70

ベートーヴェンの作品研究ピアノ協奏曲第一番の解釈 八長調、作品十五」8 (4) pp.119-125

ベートーヴェンの作品研究ピアノ協奏曲第四番の解釈 十長調、作品五十八」8 (5) pp.100-110

ベートーヴェンの作品研究ピアノ協奏曲第五番 皇帝」変ホ調、作品七十三」8 (6) pp.74-78

ベートーヴェンの作品研究ヴァイオリン協奏曲 二長調、作品六十一」8 (7) pp.64-73

ベートーヴェンの作品研究三重協奏曲 ピアノ、ヴァイオリン、セロのための。作品五十六番」8 (8) pp.99-106

門馬直衛

特輯・室内楽の研究ベートーヴェンの室内楽 (上) 様式の発展」6 (12) pp.30-36

特集・室内楽の研究 (続)ベートーヴェンの室内楽 (下) 様式の発展」7 (1) pp.79-86

秋山準 特輯・交響曲の研究ベートーヴェンの交響曲 第五交響曲を中心として」6 (10) pp.45-48

中山光雄 特輯協奏曲の研究ベートーヴェンの協奏曲」6 (11) pp.44-52

辻莊一 室内楽の本質とベートーヴェン」7 (1) pp.2-7

高野瀏 「第九」の歴史的背景とベートーヴェンの世界観」7 (8) pp.14-23

アンドレ・シュアレス、清水脩訳 「第九交響曲の美への反逆」7 (8) pp.44-46

高野瀏 「ベートーヴェンの交響曲の発足」7 (9) pp.28-35

プロドム 「「運命交響曲」の作曲に到るまで」8 (1) pp.122-128

プロドム 「「第二交響曲」作曲の頃」8 (2) pp.62-69

高木東六 「ベートーヴェン 『第一交響曲』随想」8 (1) pp.148-149

秋山準 「ベートーヴェンの革新的精神 ヴァイオリン・ソナタ第十番の批評に際して」7 (4) pp.98-99